

陽林会（第17回）京都 嵯峨野を歩く旅（大覚寺・あだしの念仏寺等）

令和元年9月20日 岩水記

令和元年9月17日（火）林陽寺駐車場を7時10分に出発、岐阜駅にて名古屋・岐阜組の7名が乗車8時10分、総勢24名にて京都嵯峨野に向かう。羽島から名神、京都南インター-10時10分、大覚寺駐車場11時。すぐに大覚寺を拝観（真言宗大覚派大本山）。のち嵯峨釈迦堂の中にあるゆどうふの老舗「竹仙」にて、伝統の京料理にて昼食。1時頃バスにて奥嵯峨のあだしの念仏寺へ。3時まで自由行動にて嵯峨野を彷徨。嵯峨野の釈迦堂に3時集合、3時10分頃現地出発。大津、養老を經由して7時頃帰山。途中、一宮付近にて交通事故があり多少時間がかかった帰路であった。ご苦労様でした。



大覚寺（だいかくじ）は、京都市右京区嵯峨にある、真言宗大覚寺派大本山の寺院。山号を嵯峨山と称する。本尊は不動明王を中心とする五大明王、開基は嵯峨天皇である。嵯峨天皇の離宮を寺に改めた皇室ゆかりの寺院である。また、後宇多法皇がここで院政を行うなど、日本の政治史に深い関わりをもつ寺院である。また、嵯峨天皇を流祖と仰ぐ華道嵯峨御流の家元でもある。

沢山の客が訪れる京都のなかで、静かなひとときを堪能するなら、おすすめはやはり市街地北西部の嵯峨野。なかでも「大覚寺」は、日本に現存する最古の庭池「大沢池」を望む風光明媚な地にあり、嵯峨天皇が愛した離宮の面影を残す門跡寺院です。“嵯峨御所”とも呼ばれた天皇ゆかりの古刹です。



大沢池の水面が街の喧騒を吸い込んでしまったかのような静かなたたずまいのなか、

池のほとりに立ち並ぶお堂。平安時代初期、嵯峨天皇がこの地に「離宮嵯峨院」を建立し、鎌倉時代にはここで政治が行われたことから”嵯峨御所“と呼ばれていました。お寺に改められたあとは代々天皇や皇族が門跡（住職）を務めてきた格式高い寺院で、貴重な文化財も数多く収蔵されています。



舟遊びを好んだ嵯峨天皇にならい、中秋の名月に大沢池に舟を浮かべる「観月の夕べ」はとくに有名であるほか、春の桜や秋の紅葉も見ごたえがあることで知られています。大沢池のなかには菊ヶ島と呼ばれる小島があり、そこに咲く野菊を嵯峨天皇が手折ったという伝承から、この菊を門外不出で品種改

良したものが「嵯峨菊」として今に伝えられています。

我々も通常の順路、大門から参拝口に上がり、「宸殿（しんでん）」から村雨の廊下を抜けて「御影堂（みえどう）」、「安井堂」、本堂の「五大堂」、「勅封心経殿（ちよくふうしんぎょうでん）」、「正寝殿（しょうしんでん）」と参拝しました。特に天皇のずらり並んだ位牌には感動しました。

江戸中期に創建された五大堂には、不動明王を中心とする五大明王が安置され、ぴりりと引き締まるような空気のなか、写経道場が設けられています。大覚寺は弘法大師を宗祖と仰ぐ、真言宗大覚寺派の本山。弘法大師の勧めによって嵯峨天皇が般若心経を写経して



嵯峨釈迦堂山門

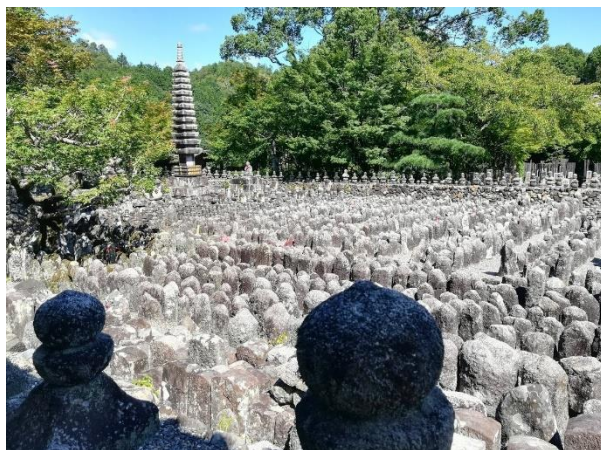
奉納され、天皇の命（勅命）によって封じられています。霊験あらたかとされるこの経「勅封心経」が開封されるのは60年に一度とされています。勅封心経が納められていることから、大覚寺は般若心経の写経を行うお寺の本山（根本道場）と位置づけられています。

格調高い大覚寺を1時間ほどゆっくりと

参拝し、嵯峨釈迦堂（清涼寺）の境内にある“ゆどうふの老舗—竹仙—”にて、季節の京野菜をあしらえたゆどうふにて昼食。ここの豆腐は、嵯峨豆腐の名店「森嘉」の豆腐とのこと。さすが値段も「陽林会」にはふさわしくないないほど・・・？。でも美味しかったとの評判。



次の訪問寺院は、「あだしの念仏寺」。バスで送ってもらい帰りは旧嵯峨街道をゆっくりとウオーキング。3時に釈迦堂集合し帰岐することとした。

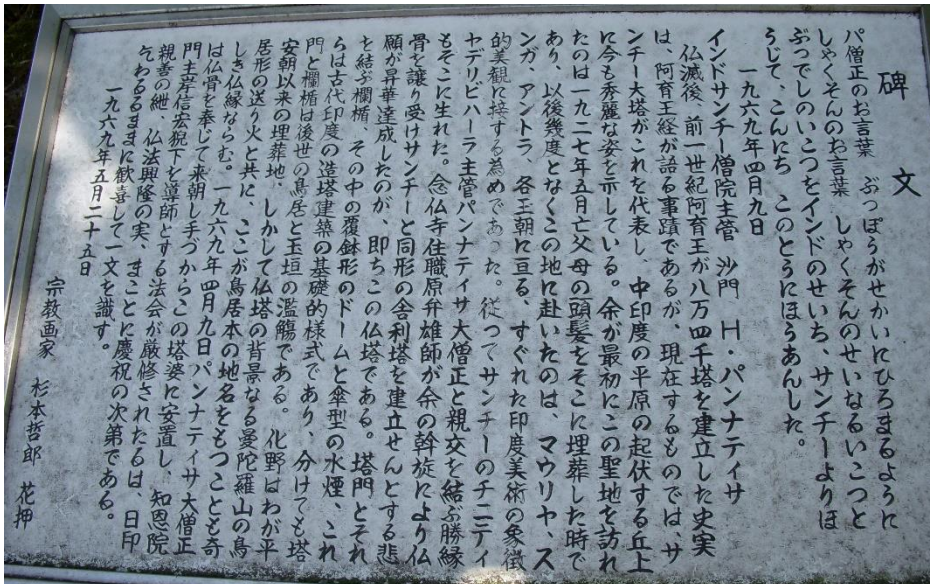


「あだしの念仏寺」は、寺伝によれば、化野の地にお寺が建立されたのは、約1200年前、弘法大師が、五智山如来寺を開創され、その後、法然上人の常念仏道場となり、現在、華西山東漸院念仏寺と称し浄土宗に属する。

「あだしの」は「化野」と記す。「あだし」とは「はかない、むなしい」との意で、又「化」の字は「生」が化して「死」となり、この世に再び生まれ化する事や、極

楽浄土に往来する願いなどを意図している。

この地は古来より葬送の地で、初めは風葬であったが、後世土葬となり人々が石仏を奉



り、永遠の別離を悲しんだ所である。

境内に奉る多くの石仏・石塔は約8000体という。夥しい数の石仏・石塔は、明治36年(1903年)頃に、化野に散在していた多くの無縁仏を掘り出して集め

たものである。境内には水子地蔵もあり、地蔵菩薩の縁日には水子供養が行われている。これらの石仏・石塔は往古あだしの一带に葬られた人々のお墓である。何百年という歳月を経て無縁仏と化し、あだしの山野に散乱埋没していた。地元の人々の協力を得て集め、極楽浄土で阿弥陀仏の説法を聴く人々になぞらえ配列安祀してある。賽の河原に模して中央に13層の石塔を中心に集められ「西院の河原」と名付けられた。

境内にインドのサンチーの仏舎利塔と鳥居(トーラナ)が設置されていて懐かしく思い出した。梵: Torana とは、インドの仏教



トーラナ



寺院や

ヒन्दゥー教寺院にみられる門のこと。サンスクリットで「塔門」を意味する。かつてはイン

ド亜大陸全土にあるストゥーパの仏塔の四方に設置されていたが、多くは仏教衰退とともに崩壊した。仏伝図や本生図などをモチーフとした精巧な彫刻が施されているものが多く、紀元前2世紀末から前1世紀頃に建設されたサンチーのトーラナにも獅子像などが掘り込まれている。日本仏法最初の官寺といわれる四天王寺にも、同様に寺社



六面体地蔵

の四方に鳥居が設置されており、狛犬などと同じく、トーラナも仏教に付随して伝来し、鳥居となったとする学説が存在する。

又、裏山に通じる竹林の道は、きれいに手入れされていて美しい。この道は、霊園墓地へと続く。霊園の一角には、六面体地蔵が祀られている。屋根の付いた六角柱のそれぞれの面に、「地獄道」「餓鬼道」「畜生道」「修羅道」「人道」「天道」を司る地蔵尊が彫られている。「オン・カカカ・ビサンマエイ・ソワカ」と唱えながら、右回りにお参りしたと紀行文にあった。

お地蔵さまは、すべての生命を育む大地を司る菩薩とされ、大きな慈悲の心で人々を包み込んで救うといわれている。弥勒菩薩が56億7000万年後に現世に出現するまではこの世には仏がない状態とされているため、その間命あるものすべてを救済する菩薩です。閻魔大王の化身であるともいわれ、この世で一度でも地蔵菩薩に手を合わせると身代わり



となって地獄の苦しみから救うとされ人々から信仰を集めました。また他の仏とは違い人道など六道を直に巡って救済を行うとされ、親しみを込めて「お地蔵さま」の名で呼ばれています。林陽寺では、8月24日の地蔵盆に「地蔵歎偈（じぞうたんげー地蔵菩薩を讃え捧げる経文）」をお唱えいたしますが、その中には六道を救う意味がすべて述べられています。

参拝の後、それぞれに嵯峨鳥居中筋の地図を片手に1時間ほどのウォーキングを楽しみながら嵯峨釈迦堂に3時集合。その間、平家物語の祇王寺や百人一首に詠まれた小倉山のふもとに広がる二尊院などを参拝。祇王寺の庭の美しさ、二尊院の参道の広さにびっくりした。

京都に行く機会は、今後もあるであろうが、嵯峨野でも奥嵯峨野に行くことはないであろうと思うと、有意義な研修であった。

彼岸を前にして、多忙な中でのレポート書きであった。多くは、ネットからの情報である。



次回もよろしくお願いいたします。